

〔論 文〕

## 文化財活用への一考察

——南アルプス市の取組から考える地域資源としての文化財・観光資源としての文化財——

和 泉 大 樹

### I はじめに

増加の一途を辿る訪日外国人観光者、地方創生、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催などを視野に入れ、各分野・方面において様々な取組が加速している。文化財の分野でも国のレベルにおいて新たな展開が認められる。

文化庁は、文化GDPの拡大に向けた取組の方向性として<sup>1)</sup>、「インパウンドの増加・地域の活力の創出（2020年東京大会に向けた文化プログラム等の実施を起爆剤として、地域の文化芸術活動の魅力を最大化し、地域経済への波及を創出する）」、「文化産業における潜在的顧客・稼ぎ手の開拓（多様性を包容する文化の力を活用し、障害者、外国人等、あらゆる人々が活躍する場を創出し、文化活動の視野を拡大する）」、「文化財で稼ぐ力の土台の形成（地域の文化財の戦略的活用や適切なサイクルの修理・美装化により、「文化財で稼ぐ」仕組みへの転換を図る）」という3つの方向性を示し、「これからの時代にふさわしい文化財の保存と活用の方策」、「文化財の持つ潜在力を一層引き出すための文化財行政の新たな展開」、「文化財を確実に継承するための環境整備」などの項目に関して調査を行うために文化審議会文化財分科会運営規則第2条第2項の規定に基づき企画調査会を設置している<sup>2)</sup>。平成29年6月1日に開催された第1回文化審議会文化財分科会企画調査会会議における配布資料「これからの時代にふさわしい文化財の保存と活用の在り方について（文化財保護法改正に向けた検討）」によれば、「文化財の一体的活用と地域振興に向けた制度改革」

などについて検討を開始し、次期通常国会において法案の提出を目指すということである。ここでは「個々の文化財を点として保存」、「地域の文化財の一体的活用が不十分」、「周遊ルート設定や解説整備など観光振興などとの連携、景観まちづくりとの連携等の円滑化」、「公開活用の主体が手薄、所有者任せ」、「持続可能な公開活用のノウハウ不足」などを現状と課題として整理し、目指す姿として「地域の文化財に関わる民間・行政が共働できる枠組みを構築」という一文のもとに「民間事業者などが文化財活用に参加」、「地域振興、景観まちづくり等と連携した取組」、「イベントや文化財のユニークな活用、保存活用の好循環など」という3つの項目をあげ、「文化財の潜在力を引き出し、地方創生・観光振興等へつなぐ」としている<sup>3)</sup>。

以上のような、文化庁における一連の展開からは、文化財がおかれている現在の状況や推測される今後の動向・情勢を踏まえ、「活用」というコンテキストにおいて、これまでの文化財の保護の在り方などを見直すという議論が進められていることが看取されよう。

このような展開を踏まえ、本稿では地域資源としての文化財、観光資源としての文化財という視点に着目して、行政の取組の中で、若干、思考をめぐらせてみたい。なお、その際、地域づくりや観光振興のステージとなる現地における視点、すなわち、地域という視点に重きを置き、山梨県南アルプス市における文化財行政に関する取組という実際に地域において展開されている事例を引きながら思考をめぐらせてみたい。

## Ⅱ 南アルプス市の概要

### (1) 南アルプス市の概要

山梨県西部に位置する南アルプス市は、平成15年(2003)4月1日に中巨摩郡櫛形町、若草町、白根町、甲西町、八田村、芦安村が合併して誕生した市である。南アルプス市という名前は一般公募から選定されたもので、「南アルプスの麓に位置するこの地域が、地理的にイメージできること」、「6町村がともに共有する南アルプスの豊かな自然と澄んだ空気といった、自然環境の特徴と一致していること」、「観光都市としての、明るく新鮮なイメージを持てる名前であること」などを理由に選ばれた。<sup>4)</sup> 総面積は264.14km<sup>2</sup>、人口は72,715人(平成27年4月1日時点)<sup>5)</sup>、市の西側は山間部、東側は平坦部となっている。御勅使川の氾濫によって形成された国内では最大級の扇状地である御勅使川扇状地などでは果樹栽培が盛んに行われている。気候は盆地特有の内陸性気候であり、夏は気温が高く、冬は寒さが厳しい地である。

### (2) 歴史的環境

ここでは南アルプス市における歴史的環境について記すこととする<sup>6)</sup>。

旧石器時代の痕跡は、山裾に展開する遺跡に顕著に見られる。上の山遺跡や六科丘遺跡、曾根遺跡などの遺跡からナイフ形石器などが発見されている。

縄文時代・弥生時代の遺跡も数多く発見されている。中畑遺跡からは縄文時代前期の13軒の竪穴建物跡が発見されている。縄文時代中期の鋳物師屋遺跡は、常時4～5軒の竪穴建物が200～300年間存在したムラであり、人体文様付有孔鍔付土器・円錐形土偶などの当該遺跡からの出土品は、国重要文化財の指定を受け、イギリスの大英博物館、イタリアのローマ市立展示館、カナダの国立モントリオール博物館など、海外の著名な博物館へも貸し出され、展示がなされているほどである。また、レプリカ法により2,800点あまりの土器片を調べたところ、

ササゲ属アズキ亜属、ダイズ属のマメ、シソ科のシソ・エゴマなどの栽培植物が発見されており、「狩猟・採集・漁労が中心の縄文人の暮らしの中に、植物栽培による初期農耕が少しずつ広がっていた」<sup>7)</sup>ことを確認することができる貴重な遺跡である。また、縄文時代後期の百々・上八田遺跡からは敷石住居の炉の中からタイの椎骨が発見されており、内陸地である当該地域へ海水魚がもたらされていたことが裏付けられている。弥生時代の油田遺跡からは農具である竪杵が出土しており、当該地の稲作の展開を物語る。また、住居跡などが発見されている弥生時代後期の住吉遺跡からは、中部東海地方の影響を受けた土器が多数出土しており、当該地域の土器研究上、貴重な成果が得られている。

古墳時代、丘陵上に物見塚古墳や六科丘古墳などが築かれた。なかでも、物見塚古墳は全長51mを測る5世紀前半の前方後円墳で主体部は木棺直葬ないし粘土槨、玉類や刀剣などが多数出土しており、昭和63年(1988)に山梨県指定史跡となっている。また、丘陵のみでなく、低地にも大師東丹路古墳が築かれた。

平安時代には、後に「八田牧」と呼ばれた牛馬の飼育施設が置かれ当該地域の開発が進展した。百々遺跡から検出された88体分の牛馬の遺体はこのことを裏付けるものである。平安時代末から鎌倉時代にかけて甲斐源氏が活躍したが、その1人である加賀美遠光は加賀美を本拠地として地盤を築き、甲府盆地西部から富士川流域を勢力圏とした。加賀美遠光の館跡である現法善寺は昭和46年(1971)に、長子である秋山光朝の館跡である現熊野神社は昭和44年(1969)に市史跡となっている。

当該地域の歴史は、御勅使川・釜無川が織り成したと言っても過言ではない。御勅使川旧堤防(将棋頭・石積出)は、信玄堤とともに、武田信玄によって御勅使川・釜無川を治めるために築かれたと伝承されており、近世・近代には扇状地に展開した集落・耕地を守るために機能した堤防施設で、平成15年(2003)に国史跡の指定を受けている。当該地域の現代に至るまでの

Oct. 2017

文化財活用への一考察

水をめぐる展開については、治水史研究の分野においても注目されている。

また、太平洋戦争の終末期にはロタコと称される御勅使河原飛行場が建設されたが、滑走

路や掩体壕などの飛行場施設の痕跡の一部が残存しており、戦争の記憶を今日に生きる我々に伝えている。



図1 南アルプス市遺跡分布図

出所)『南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック第3集 Ver2 大地の記憶』, 2017年, 南アルプス市教育委員会から転載

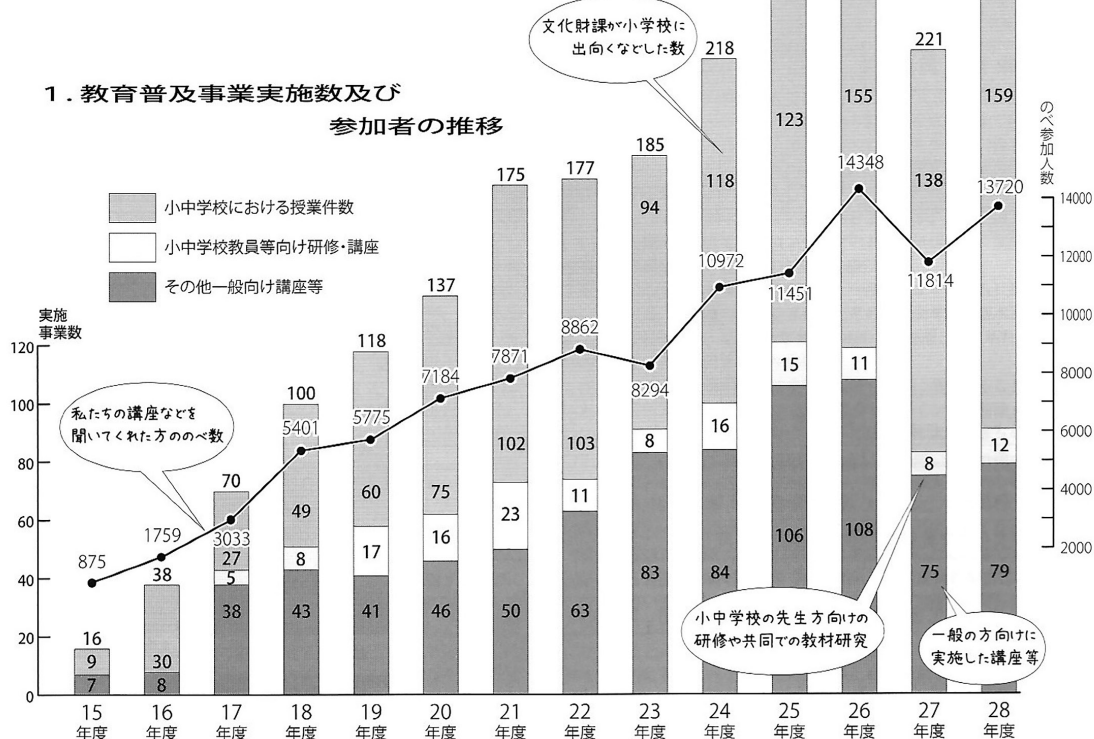


## 第2章 みんなに知ってほしいから 教育普及事業

### 第1節 講座等

#### 1. 教育普及事業実施数及び

#### 参加者の推移



グラフ1 教育普及事業実施数及び参加者の推移

出所)『山梨県南アルプス市文化財年報—平成28年度—』, 2017年, 南アルプス市教育委員会, 2ページから転載

### Ⅲ 南アルプス市における文化財行政の展開

#### (1) 組織体制

この章では, 組織体制, 教育普及事業・普及啓発活動・市内の文化財の基礎的調査などの実際に実施されている事業展開を記し, まとめることとする<sup>8)</sup>。

現在, 南アルプス市の文化財保護・活用の組織体制は文化財課が担っている。平成15年(2003)に教育委員会生涯学習課文化財担当が市町村合併により発足し, 平成17年(2005)に

機構改革により生涯学習課から文化財課へと独立している。

文化財課は, 教育総務課, 学校教育推進課, 生涯学習課などとともに教育委員会を構成するセクションで, 文化財課長(1名), 文化財担当リーダー(1名), 文化財担当(4名), 重要文化財安藤家住宅担当(再任用職員1名), ふるさと学芸員養成事業(臨時職員2名), ふるさと文化伝承館(臨時職員3名)という人員体制である。このうちの文化財リーダー, 文化財担当が大学・大学院などで考古学などを専攻し, 発掘調査などの各種文化財調査にあたる文化財に関す

Oct. 2017

文化財活用への一考察

表1 平成28年4月に実施した教育普及事業等一覧

4月				
日	事業名	対象	人数	内容
13	修学旅行事前学習	南湖小学校6年生	40人	南アルプス市と鎌倉、仏像の見方について
13	総会・研修会	十日市場老人クラブ	35人	十日市場の歴史
14	修学旅行事前学習	南湖小学校6年生	41人	南アルプス市の中の鎌倉を訪ねて（現地見学）
14	社会科（縄文～古墳時代）	白根飯野小学校6年生	53人	地域の縄文～古墳時代
14	校外学習	櫛形北小学校6年生	37人	地域の遺跡めぐり
15	県内文化財の視察	にしのかぼ若返る会	20人	韮崎市の文化財と伝承館鑑染体験
18	社会科（縄文～古墳時代）	八田小学校6年生	83人	伝承館で歴史体験学習
19	修学旅行事前学習	白根源小学校6年生	25人	南アルプス市と鎌倉、仏像の見方
20	修学旅行事前学習	白根東小学校6年生	67人	甲斐源氏と鎌倉について
21	修学旅行事前学習	白根東小学校6年生	68人	南アルプス市の中の鎌倉を訪ねて（現地見学）
21	ふるさと歴史探訪会	加賀美シニアクラブ	14人	御勅使川の史跡めぐり
22	社会科（縄文～古墳時代）	白根飯野小学校6年生	53人	県考古博物館・伝承館・古墳などの見学
26	総合的な学習	落合小学校6年生	28人	地域の歴史的な文化財の見学や体験（綿花づくり体験）
29	高尾ガイドツアー	一般	30人	フットパスで高尾地区のご案内
29	小笠原長清公顕彰会総会特別講話	小笠原長清公顕彰会および流鏑馬実行委員会	52人	小笠原流の歩みについて

出所)『山梨県南アルプス市文化財年報—平成28年度—』, 2017年, 南アルプス市教育委員会, 2ページから転載

る知識を持する専門職員である。

以下, 南アルプス市における文化財行政の内容について, その概要を確認したい。

## (2) 教育普及事業

南アルプス市の文化財行政の特色の1つは, 教育普及事業への取組であると言える。とにかく, その実施回数の多さには目を見張るものがある。

グラフ1に示される通り, 市内の小中学校における年間の授業件数は, ほぼ右肩上がりであり続けている。平成15年度は9件であったが, 平成16年度は30件, 平成17年度は27件, 平成18年度は49件, 平成19年度は60件, 平成20年度は75件, 平成21年度は102件と7年目にして100件を超え, 続く平成22年度は103件, 平成23年度は94件, 平成24年度は118件, 平成25年度は123件, 平成26年度は155件, 平成27年度は138件, 平成28年度においては159件を数える。また, 児童・生徒のみでなく, 小中学校教員向けの研修・講座も合わせて実施している。こちらは平成17年度からスタートしている。初年度である平成17年度は5件, 平成18年度は8件, 平成19年度は17件, 平成20年度は16件, 平成21年度は23件, 平成22年度は11件, 平成23年度は8件, 平成24年度は16件, 平成

25年度は15件, 平成26年度は11件, 平成27年度は8件, 平成28年度は12件を数える。これらに加えて, 一般向けの講座なども実施している。平成15年度は7件, 平成16年度は8件, 平成17年度は38件, 平成18年度は43件, 平成19年度は41件, 平成20年度は46件, 平成21年度は50件, 平成22年度は63件, 平成23年度は83件, 平成24年度は84件, 平成25年度は106件と11年目にして100件を超え, 続く平成26年度は108件, 平成27年度は75件, 平成28年度は79件を数える。そして, これらに参加した年間の延べ人数は, 平成15年度は875人, 平成16年度は1,759人, 平成17年度は3,033人, 平成18年度は5,401人, 平成19年度は5,775人, 平成20年度は7,184人, 平成21年度は7,871人, 平成22年度は8,862人, 平成23年度は8,294人, 平成24年度は10,972人と10,000人を超え, 続く平成25年度は11,451人, 平成26年度は14,348人, 平成27年度は11,814人, 平成28年度は13,720人を数える。

実施件数もさることながら, その内容についても注目に値するものがある。例えば, 表1のように, 平成28年度の4月については29件の事業が実施されているが, このうちの5件は修学旅行の事前学習である。鎌倉へ修学旅行に行く市内の小学校6年生に, 「南アルプス市と鎌

倉, 仏像の見方について」, 「南アルプス市の中の鎌倉を訪ねて」, 「甲斐源氏と鎌倉について」という内容で授業を展開しているのである。ここでは, 自分たちの住む地域と目的地である鎌倉の関係性を根幹に据えて授業を実施している訳であるが, 修学旅行をも地域を理解することにつなげるという地域学習への想いが看取される。何よりも修学旅行の事前学習を教育委員会文化財課の職員が実施している点は, 決して各地で頻繁に見られることではないと考えられる。

文化財課の田中大輔氏によれば, 市内の学校教員から, 「文化財課は地域の学校に寄り添ってくれている気がします」との感謝の言葉を頂戴しているそうである<sup>9)</sup>。

### (3) 普及啓発活動

#### ①メールマガジン

南アルプス市が発行するメールマガジン「南アルプス市ふるさとメール」において, コラム「よみがえる原風景 今, 南アルプス市が面白い」を執筆している。このメールマガジンは, 山梨日日新聞社とタイアップして, 南アルプス市における最新情報, 観光情報, 山梨日日新聞に掲載された南アルプス市に関係する記事などを掲載・配信されている。また, 会員登録するとダイジェスト版のメールも配信される。

平成28年度は「南アルプス市を駆けた武田信玄家臣団」, 「南アルプス市を訪れた人々 伊能忠敬」, 「南アルプス市を訪れた人々 ローウェンホルスト・ムルデル」, 「南アルプス市を訪れた人々 東山魁夷」, 「南アルプス市の小正月～道祖神場のお飾りととんど焼きの風景～」, 「ふるさと〇〇(まるまる)博物館」スタートアップ連載「〇博(まるはく)」への道(1) 櫛形小学校の取り組みから」, 「ふるさと〇〇(まるまる)博物館」スタートアップ連載「〇博(まるはく)」への道(2) 掘り起こし～育み～伝えるプロジェクト」など, 10月を除く毎月, 計11回の配信がなされている。なお, 通算配信数は153回を数える。

#### ②広報誌

南アルプス市が毎月1日に発行する『広報南アルプス』において「ふるさと誇り」という連載枠を執筆している。平成28年度は「受け継がれる伝統 今諏訪の御柱祭」, 「路傍の石は語る 何気ない風景の中にその地域だけのたったひとつしかないストーリーがある」, 「地中の遺構を眺めるしかけ「MナビAR～遺跡で散歩」」, 「夏は氷! 高尾の天然水に涼を感じた頃」, 「宝永地震の記憶～安藤家住宅の祈祷札～」, 「モニュメントが語る災害の記憶」, 「悠久の歴史を紡ぐ 古市場若宮八幡神社とその周辺」, 「国宝・重要文化財だけじゃない! わがまちの国登録有形文化財」, 「浄土憧憬」, 「にしごおり 和菓子の伝統」, 「～受け継がれる想い～南アルプスの風土と伝統行事」というタイトルで掲載がなされている。なお, 平成18年度5月号より基本的に毎月連載がなされ, 通算連載回数は116回を数える。

ここでは市の文化財を単純に紹介するだけではなく, みなさんの住む地域の文化財であるということを地域の方々へ理解してもらおうというメッセージが込められている。文化財課から地域住民への簡単なラブレターのようにも思われる。例えば, 6月号「路傍の石は語る 何気ない風景の中にその地域だけのたったひとつしかないストーリーがある」では, 葉タバコ専売所の跡である「飯野専売支局」跡を伝える地域の石造物を紹介しているが, ここには「道端にたたずむ石のように, 普段気にとめることのない何気ない風景の中に, 実はその地域にしかないオリジナルなストーリーが潜んでいることがあります。もの言わぬそれらは地域の歩みを語る語り部でもあり, 地域らしさを示す資源でもあるのです。上段で紹介した三つの「石」は, いずれもそれだけで紹介したいほどの物語をもっていますし, 市内にはまだまだ沢山のもの言わぬ語り部がたたずんでいます。それらは, その地域では当たり前知られているものもあれば, 地域の方でも忘れ去られているものもあります。みなさんの地域にもきっとあることでしょ

Oct. 2017

文化財活用への一考察

う。その地域のオンリーワンを語るものですから、ぜひ、地域の方々によって掘り起こして、守って、ストーリーを語り継いでいただきたいと思います。きっとそれは地域の「魅力」や「誇り」へと育まれていくことでしょう」<sup>10)</sup>という一文が認められる。また、12月号「国宝・重要文化財だけじゃない！わがまちの国登録有形文化財」では、登録有形文化財に新規登録がなされた『旧飯野産業組合倉庫』、『御北穂坂家住宅主屋』、『御西穂坂家住宅主屋』などを紹介するとともに「市を語る地域資源としてこれらの建造物の重要性は意匠だけでなく、そこに蓄積された風土の歴史・人々の思いでもあります。地域の大切な資源・誇りとして守り伝えていけるよう、市でも取り組んでまいります」<sup>11)</sup>という一文が添えられており、地域住民へ寄り添っていく方向性を示している。

まさに「ふるさとの誇り」という連載タイトルの通りの思考が読み取れる文章である。

#### (4) 市内の文化財の基礎的調査

南アルプス市では、市内に所在する文化財の基礎的調査にも継続的に取り組んでいる。平成28年度においては、下記の通り、12を数える調査を実施している。

- ☐諏訪神社(平成28年4月3日) 民俗
- ☐山本家(平成28年5月2日) 美術工芸
- ☐穂坂家ほか(平成28年5月21日) 建造物
- ☐平岡地区(平成28年7月11日) 民俗
- ☐浅原家(平成28年8月9日) 古文書
- ☐県立博物館(平成28年8月18日) 古文書
- ☐甲斐市(平成28年10月9日) 民俗
- ☐戸田地区(平成29年1月8日) 民俗
- ☐杓沢地区(平成29年1月13日) 民俗
- ☐芦安・曲輪田地区(平成29年1月14日) 民俗
- ☐杓沢・小曾利地区(平成29年1月22日) 民俗
- ☐戸田稲荷(平成29年3月6日) 民俗

このような市内の文化財調査については、調査するだけでなく、その成果をきちんと市民へ向けて発信することに努めている。例えば、平成29年(2017)1月14日に実施した芦安・曲輪田地区における民俗調査の内容の一部を先に記した『広報南アルプス』の連載「ふるさとの誇り」の3月号「～受け継がれる想い～南アルプス市の風土と伝統行事」において、「今回は1月に実施した芦安地区での小正月行事の調査内容を元に南アルプス市の風土と伝統行事についてお話しします」<sup>12)</sup>と2ヶ月後に報告するその迅速さには目を見張るものがある。

#### (5) 発掘調査・分布調査

平成28年度においては、下記の通り、4件の発掘調査(本調査)を実施している。

また、石積出五番堤・飯野新田堰、上ノ東古墳及びその周辺の2件の分布調査を実施し、基礎的データの獲得などに努めている。

- ☐周知の埋蔵文化財包蔵地範囲外(桃園地内)
  - 調査期間：平成28年5月12日～5月19日
  - 調査面積：34.12㎡
  - 調査成果：土坑などが検出された 他
- ☐野牛島・石橋遺跡第3地点
  - 調査期間：平成28年5月12日～5月27日
  - 調査面積：152.5㎡
  - 調査成果：中世の土坑群が検出された 他
- ☐寺部村附第7遺跡
  - 調査期間：平成28年9月12日～10月17日
  - 調査面積：約425㎡
  - 調査成果：平安後期の墓墳が検出された 他
- ☐前御勅使川堤防址群
  - 調査期間：平成29年2月27日～3月9日
  - 調査面積：約135㎡
  - 調査成果：砂礫堤が検出された 他

#### (6) 史跡整備事業

平成28年度は史跡保存整備検討委員会を2回開催し、榊形堤防の整備方針・計画案や六科将棋頭の整備方針案などについて議論を進めている。



また、石積出二番堤において民有地との境界柵の設置を行っている。

#### (7) ふるさと文化伝承館における事業

市内の文化財などの収集・保管・展示・調査研究・教育普及などを行う施設であるふるさと文化伝承館において、下記のような事業を実施している。

なかでも、鋳物師屋遺跡出土の妊婦姿の土偶にちなんで「ベビーマッサージ」を開催しているが、文化財からの発想とは思えず興味深い。

##### ① エントランス展示

☐ 「古民具が語る南アルプス市の歴史～ぼくたちはガラクタじゃない～」

開催期間：平成28年5月20日～9月14日

☐ 「神々が宿る森～穂見神社と高尾集落～」

開催期間：平成28年9月16日～12月14日

☐ 「にしごおり 和菓子の世界」

開催期間：平成28年12月16日～平成29年5月17日

##### ② 体験学習など

☐ ミニチュア縄文土器焼き

実施日：平成28年5月22日

参加者：8名

☐ 「小麦の物語」教室

実施日：平成28年7月31日

参加者：19名

☐ 勾玉づくり

実施日：平成28年8月10日・11日

参加者：41名

☐ ベビーマッサージ

実施日：平成28年5月20日～平成29年3月17日の間に6回開催

参加者：129名

☐ 縄文夜会

実施日：平成28年9月3日

参加者：518名

☐ 藍染めの歴史と生葉染め体験

実施日：平成28年9月24日

参加者：24名

☐ Jomon FES－山梨縄文まつり－

実施日：平成28年10月30日

参加者：600名

備考：他所イベントにブースで出展

☐ ミニ展示 キッズが描いたラヴィのチラシデザイン展

実施日：平成29年2月10日～4月12日

☐ 市内の和菓子の歴史を学ぼう

実施日：平成29年3月11日

参加者：29名

☐ 南アルプスファミリーフェスタ

実施日：平成29年3月12日

参加者：413名

備考：他所イベントにブースで出展

#### (8) 重要文化財安藤家住宅における事業

安藤家住宅は宝永5年(1708)に建築された主屋をはじめとして敷地全体が国重要文化財に指定されている。平成20年より山梨県から南アルプス市に所有の移管がなされ、平成28年度においては、以下のように多くのイベントが企画され、その活用がなされている。

☐ 安藤家住宅雛祭り

実施日：平成28年2月4日～4月4日

期間中來館者(4月1日～4日)：50名

☐ 安藤家住宅端午の節句

実施日：平成28年4月21日～5月16日

期間中來館者：640名

☐ 安藤家住宅七夕の節句

実施日：平成28年6月29日～7月7日

期間中來館者：137名

☐ 安藤家住宅で昔あそびとお話会

実施日：平成28年7月29日

参加者：34名

☐ 安藤家でちょっとこわい夏の夜話

実施日：平成28年8月5日

参加者：28名

☐ 五感で楽しむ安藤家秋祭り

実施日：平成28年10月10日



Oct. 2017

文化財活用への一考察

参加者：昼の部169名・宵の部277名

□すずの会「秋を読む」

実施日：平成28年10月19日

参加者：42名

□安藤家住宅ライトアップ

実施日：平成28年11月22日・23日

参加者：113名

□安藤家住宅ミニ門松作り

実施日：平成28年12月17日

参加者：26名

□地域の獅子舞（西南湖の獅子舞）

実施日：平成29年1月15日

□安藤家住宅雛祭り

実施日：平成29年2月9日～4月3日

期間中来館者：2,052名

また、安藤家住宅では、貸出業務も実施しており、コンサート会場、結納の場、歴史系コスプレの撮影会場などに使用されている。

#### （9）文化財保護事業

文化財保護事業として、坐像保存修理事業、クモマツマキチョウ等の高山チョウ生息環境調査、県指定宝珠寺のマツ維持管理事業、市指定宗林寺のイロハモミジ維持管理事業、市指定山寺八幡神社シラカシ林協議、市指定沢登六角堂保護活用事業、市指定成妙寺のマツ維持管理事業、重要文化財安藤家住宅緊急修繕事業、市指定清水八幡の夫婦ケヤキ倒木回避事業、横小路家・名取家文書調査、芦安伝統文化継承事業、文化財教育普及看板設置事業、史跡公園等管理業務、県指定宝珠寺のマツ害虫防除事業、県指定鏡中条のゴヨウマツ害虫防除事業、重要文化財長谷寺本堂防災施設保守点検事業、史跡等における草刈等維持管理業務、地域史料の購入、文化財防火デー、文化財保護審議会の開催などを行なっている。

#### （10）小結

以上、南アルプス市における文化財行政について、その概要を確認したが、少人数である組

織体制ではあるが、これまで多岐にわたる文化財行政を展開していることが認められた。このことは南アルプス市の地理的環境による地域住民の先入観に起因すると考えられる<sup>13)</sup>。やや長文ではあるが、そのことが看取される文章が存在するためここに引用する。

甲府盆地西部、釜無川（富士川）西岸に位置する南アルプス市は、西側に脆く崩れやすい急峻な山岳がせまり、前面を常襲洪水河川である御勅使川や釜無川に画され、これら山岳から流れ下ってきた河川が形成した扇状地が幾重にも重なり合う地理的環境にあります。そのため、かねてより洪水や土石流が頻発し、逆に河川が運搬した砂礫が厚く堆積した扇状地の上は「月夜でも焼ける」と言われる程の干ばつ地帯ともなり、その厳しい自然環境から、それ以前から行われてきた先駆的な発掘調査による発見はあったものの、長く丘陵や台地状の一部を除いて人間の生活した痕跡（＝遺跡）にとぼしい地域と認識されてきました。

しかし、「ここにも豊かな歴史があるはず」と信じる精力的な様々な人々の努力、熱意と情熱、斬新な発想によって、近年この地を厚く覆う水と砂のヴェールは少しずつはがされ、厳しい風土に対峙して、様々な工夫でこれを克服した人々の生活が次々と明らかにされるようになりました。南アルプス市域も県内外の他の地域と比べても決して遜色のない、豊かで個性的な歴史を紡いできたのです。

しかし、元々、「なにもない」という歴史認識からスタートしていることもあり、市民にはまだまだ、「豊かな歴史がある」という認識を持ち得ない方も多くおられます。自らのふるさとが歴史豊かであること、しかしその歴史は決して平坦ではなく、水害や扇状地特有の干ばつ、土石流に苦しみながら、その時々の人びとが常にへこたれず未来を紡いできたことを、発見された遺跡群は教えてくれます。（以下、省略）

「開催趣旨」『山梨考古』第134号、2014年、山



写真1 南アルプス市教育委員会文化財課のPRパンフレット

## 梨県考古学協会

繰り返される洪水や土石流と共存する地にあって、人々の営みの歴史など見当たらないのではないかという思考が地域住民に先入されているところからの出発である。とにかく、「ここにもある」との思考を地域へ浸透させることが重要であり、このことを追求していった結果の展開であると考えられる。毎月20を超える学校への授業、教員への研修・講座などの教育普及活動は、先に記した「文化財課は地域の学校に寄り添ってくれている気がします」<sup>14)</sup>という学校教員が発した言葉の通り、市内の学校へ寄り添いながら地域にも誇るべき歴史があることを感動とともに伝え、実施した調査成果の一部を2ヶ月で発信するその迅速さは「地域には歴史や文化財がまだまだあるぞ」ということを伝えているように思える。そしてこのことは、「こ



こまで文化財課の事業がインフレーション」を続けたのは、市内の歴史的資産に気付いてほしい！大切に思っていてほしい！個性的なまちづくりを活用してほしい！との想いで突っ走ってきたからです」<sup>15)</sup>との言葉の通りであり、担当各々が同じ想いを胸に文化財行政を展開していることに他ならないであろう。

地理的環境による地域住民の「ここにはなにもない」という思考を何とかして「ここにもある」という思考へと変えようとする職員の情熱が「寄り添う」という施策の基本的な方向性を見出すことになる。そしてこの「寄り添う」という方向性は、結果的に教育普及事業の充実や調査成果の迅速な披露、Mナビへの音声、MナビAR<sup>16)</sup>、手作りの文化財説明板などへつながらることとなるのである。

Oct. 2017

文化財活用への一考察

#### Ⅳ まとめ

南アルプス市教育委員会文化財課は、以下のような文章を綴っている。

「ここまで文化財課の事業がインフレーションを続けたのは、市内の歴史的資産に気付いてほしい！大切に思っていてほしい！個性的なまちづくりに活用してほしい！との想いで突っ走ってきたからです。振り返ってみれば逆境の中、事業の拡大を志向しなければ、戦線の維持すら難しかったでしょう。たしかに、援軍のない状態で戦線を拡大する訳ですから、それぞれの事業の質は粗くなりがちです。もう限界を越えているのは自他ともに認められる状態ですので、そろそろ着地点を見定め事業全体をマネジメントする時期に来ているとは思いますが、戦線が拡大しきった状況で急激な事業転換も難しい状況。そうなると外からは畢竟「選択と集中」を求められることになり、たとえば市としての主要施策を実施するために、我が文化財課を全国的にもユニークな文化財課たらしめる根本である「学校や地域に細やかに寄り添った教育普及事業」そのものの見直しを迫られたりします。でもそれも本末転倒、やはりスマートな事業運営への転換には若干の時間が必要で、それには新たな人的資源の供給も不可欠かと。。。担当は考えています。市民の皆様が、地域づくりのパートナーとして、文化財課の存在の永続性を求めてくれることを切に願います」

「はじめに」『山梨県南アルプス市文化財年報—平成28年度—』、2017年、南アルプス市教育委員会

ここで注目すべきは「地域づくりのパートナー」というフレーズではなかろうか。すなわち、文化財課による「市内の歴史的資産に気付いてほしい！大切に思っていてほしい！個性的なまちづくりに活用してほしい！」という想いの中、「学校や地域に細やかに寄り添った教育普及事

業」などを展開してきたのは、地域づくりの素材としての文化財という思考がその根底に存在したからであろう。もちろん、他の自治体の文化財行政においても同様の思考を持っているのであろうが、先にも記したように、当該地域においてはその地理的環境による「なにもない」という先入観が地域に蔓延していたが故に、このような想いも顕著であったのであろう。

南アルプス市の文化財課の展開は、地域資源としての文化財を十分に意識した十分な取組であると考えられよう。そして、ここから目指す次のステップは、地域住民からの自発的かつ積極的なアクションやムーブメントの創発であろう。しかしながら、このことはそう容易なことではない。一般に、市民協働も含めて、行政サイドからの提供に積極的に反応するという現象は各地で多く見られるが、提供せずともアクションそのものが地域サイドから自発的に創発することはなかなか困難ではなかろうか。

このことを促進するために「観光」という手法を用いることは有効であると考えられる。つまり、文化財に興味・関心のある方々は言うまでもないが、文化財にそれほど関係のない立場の方々や無関心な方々が、文化財に何らかの接点や可能性を見出すということにつながるものが想定され、結果として広く文化財を周知すること、ひいては保護・保存、経済振興なども含めた活用など、その枝葉が広がることなどにつながるのではないかと考えるからである。もちろん、文化財の保護は、観光振興を第一義とするものではないが、文化財にマイナスの影響を及ぼさないということであれば、「観光」との「共存」は地域資源という観点からも有効な手法であると考えられる。

筆者はこれまで、地域資源と観光資源というタームを積極的に区別して思考する場面に遭遇することがなかったが、文化庁の動きや南アルプス市の現地調査を経て、改めて地域資源としての文化財、観光資源としての文化財という2者の観点の顕著な意識につながった。文化財において、地域資源と観光資源という2種のター



ムを顕著に意識して使い分けることは、単に言葉の問題という机上の面にとどまらず、存外、実践の面で重要であると考えられる。当該文化財の価値が適正に評価され、適正に保存・管理され、地域における理解の浸透という多種多様な活用にも耐えうる土壌の形成がなされ、適切に活用されることにつながると考えられる。

古賀学は、観光地域づくりという語を使用する意図を説明する際に「地域にある多種多様な地域資源を積極的に活用し、地域の創意工夫をもって魅力ある観光資源（観光対象）に育て上げて観光振興を図っている活動」<sup>17)</sup>と説明しているが、筆者はこの説明に賛同している。とりわけ、地域の創意工夫、つまり、地域が資源を育て上げるという点には大いに賛同する。

ここで今一度確認しておくべきは、地域資源が観光資源に取って代わることはないということである。地域資源としての文化財に観光資源としての文化財という一面が存在するのである。可能性の1つが育て上げられるということであると理解している。

そして、冒頭で記したように、現在及び推測される今後の動向・情勢を踏まえ、活用というコンテキストにおいて、これまでの文化財の保護の在り方等を見直すという議論が進められていることが看取される。このことは不可欠な議論であると考えられるが、新たな面にばかり目を向けるのではなく、これまで有効に機能していた良い面を伸ばすという観点も大切だと考えられる。つまり、今一度、地域資源としての展開にも目を向けるべきであろう。

先に記したように、南アルプス市教育委員会文化財課の担当者は、「新たな人的資源の供給も不可欠」<sup>18)</sup>であると発言するが、この言葉は一自治体の問題ではないと考えられる。観光資源として有効に機能させることを思考するならば、その土台である地域資源としても有効に機能させることも合わせて思考するべきであると考えられる。すなわち、新しい動きの中で人材という視点においても大きく取り上げる必要があると考えられる。つまるところ、地域資源と

しての充実が観光資源としての展開の充実にもつながることであろう。

### 〔謝 辞〕

南アルプス市教育委員会文化財課の田中大輔氏、斎藤秀樹氏、保阪太一氏には多くをご教示いただきました。記して感謝します。ありがとうございました。

### 〔付 記〕

本稿は平成29年度阪南大学産業経済研究所助成研究の成果報告の一部である。

### 注

- 1) 「文化芸術資源を活用した経済活性化（文化GDPの拡大）」  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai\\_16/67/pdf/shiryo2.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_16/67/pdf/shiryo2.pdf)  
(2017.07.04 アクセス)
- 2) 「文化審議会文化財分科会企画調査会の設置について」  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h29/01/pdf/shiryo\\_1.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h29/01/pdf/shiryo_1.pdf)  
(2017.07.04 アクセス)
- 3) 「これからの時代にふさわしい文化財の保存と活用の在り方について（文化財保護法改正に向けた検討）」  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h29/01/pdf/shiryo\\_5.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h29/01/pdf/shiryo_5.pdf)  
(2017.07.04 アクセス)
- 4) 「南アルプス市の紹介「南アルプス」名前の由来」  
<http://www.city.minamialps.yamanashi.jp/shisei/syokai/syokai.html> (2017.07.04 アクセス)
- 5) 「南アルプス市の紹介「位置・広さ・特徴」」  
<http://www.city.minamialps.yamanashi.jp/shisei/syokai/syokai.html> (2017.07.04 アクセス)
- 6) 「歴史的環境」をまとめるにあたり、下記を参考にした。  
・『山梨考古』第134号、2014年、山梨県考古学協会  
・『南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック第4集 歴史舞台を駆けた南アルプス市の甲斐源氏』2014年、南アルプス市教育委員会  
・『南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック第2集 Ver4 堤の原風景』、2017年、南アルプス市教育委員会  
・『南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック第3集 Ver2 大地の記憶』、2017年、南アルプス市教育委員会

Oct. 2017

文化財活用への一考察

- 7) 中山誠二「レプリカ法と鋳物師屋遺跡」『山梨考古』第134号, 2014年, 山梨県考古学協会, 3ページ
- 8) 「南アルプス市における文化財行政の展開」をまとめるにあたり, 下記を参考にした。  
なお, 事業内容については, 基本的に平成28年度の実績を記した。  
また, 平成28年度事業として「ふるさと〇〇博物館」という地域の歴史資源を掘り起こし・育み・伝えるというステップを地域住民とともに展開するという内容の事業も実施されているが, 当該事業については筆者の調査不足もあり, 本稿では取り上げなかった。  
・『山梨県南アルプス市文化財年報—平成28年度—』2017年, 南アルプス市教育委員会  
・南アルプス市ふるさとメール  
<http://sannichi.lekumo.biz/minamialps/>  
(2017.07.04 アクセス)  
・『広報南アルプス』  
<http://www.city.minamialps.yamanashi.jp/shinsei-syorui/shisei/koho-minami-alps>  
(2017.07.04 アクセス)
- 9) 南アルプス市において実施した現地調査の際に南アルプス市教育委員会文化財課の田中大輔氏より伺った。(2017.06.16現地調査実施)
- 10) 『広報南アルプス』2016.6 No.159 平成28年6月1日, 12ページ
- 11) 『広報南アルプス』2016.12 No.165 平成28年12月1日, 17ページ
- 12) 『広報南アルプス』2016.12 No.165 平成29年3月1日, 12ページ
- 13) 南アルプス市教育委員会文化財課の田中大輔氏のご教示による。また, 本稿で以下に取り上げるそのことを詳しく記す文章(「開催趣旨」『山梨考古』第134号, 2014年, 山梨県考古学協会)の存在についてもご教示いただいた。
- 14) 前掲注9)
- 15) 「はじめに」『山梨県南アルプス市文化財年報—平成28年度—』, 2017年, 南アルプス市教育委員会
- 16) 「MナビAR」などについては別に稿を起こす用意がある。
- 17) 古賀学「テーマ別事例編 序論」『観光実務ハンドブック』, 2008年, 社団法人日本観光協会編, 3～4ページ
- 18) 前掲注9)

(2017年7月14日掲載決定)

